

# 小児看護 10

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.45 No.10 OCTOBER

2022

## 麻醉下で手術や検査・ 処置を受ける子どもの看護 部署や職種を越えた切れ目のないケア

連載

脳性麻痺の子どもの  
リハビリテーション【最終回】  
主たる移動手段が  
バニーhopピングから  
歩行へと移行した事例



へるす出版

佐藤聰美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

## 第17回 もはや患者ではない

私は自信なげな人が好きだ。「私でも役に立てますか」と不安なぐらいがちょうどいい。そういうと、驚かれるだろうか。

小児がんのボランティアの募集には、しばしばやる気に満ちた人が来る。院内のプレイルームで絵本の読み聞かせ。ある企業の偉い人の奥様が応募してきた。発展途上国でも絵本の読み聞かせをしていたから任せてくれ、とのことであった。

治療の合間に、三々五々、遊んでいた子どもたち。彼女は、そこにつかつかと入り込んで、アンパンマンのテレビを消し、「絵本を読むから集まって」と呼びかけた。私の不安は的中した。「ちゃんとお座りをして」とまで言い出した。

この人も、か。かわいそうな子どもに良いことをしてあげている自分を体感するために、子どもを利用するのだ。患者がボランティアに付き合わされる。そんなエピソードは、日本にごまんとある。ほどなくして、彼女の活動は終了した。

企業にも類似はたくさんあるらしい。サイバーエージェントの藤田晋氏が記していた。スタートアップ時代に、優秀な人が欲しくて、大手企業のキャリア経験者を中途採用した。すると、彼はその日から理念やモデルの勉強会を開いて、若手の仕事時間を平気で奪っていたため、藤田氏がそれを止めさせた。やる気と独りよがりの自信は目を曇らせ、自分のやりたいことをやってしまう。しかも、それが正しいと信じて。

時に、市民公開講座に呼ばれた。子どもの発達で大事なことを聞かれた。私は、「大人がちゃんと年を取つて枯れていくことだ。ふりでいいから。それをみて、子どもは自分で頑張るしかないとひしひしと感じ取る」と答えた。

熱すぎるボランティアも、自信のある中堅社員も、元気すぎる高齢者も、次世代が育つ機会を奪っているのだ。長寿社会だからこそ、トーンダウンして弱いふりをするテクニックが大事だと考えている。それが相手の力を引き出すのだ。

昔、自立した女性が増えたころ、雑誌やテレビで「君は僕がいなくてもやっていける。でも、彼女は僕がいないとダメなんだ」というセリフが流れた。本当は「君」より「彼女」のほうが100倍以上、強いのに。男性に「僕がいないとダメだ」と思われられるくらいしたたかなのだから。

と前置きが長くなつたが、私は音読クラブを始めた。小児がんの子どもが大人のボランティアにオンライン上で、国語の教科書を読んでくれるのだ。子どもはボランティアを物語の世界にいざなってくれる。物語から脱線して、子どもは歓談を楽しみ、ボランティアはその本が読みたくなったという。患者とボランティアという役割が徐々に剥がれて、病気が消えていく。社会を築く共同の創造者として、双方が生まれ変わっていくのである。

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国の Bellevue Community College を卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。